

おほ 太田入道殿御返事

建治元年（一二七五）十一月三日。五十四歳。於身延。  
大田乗明宛。十一紙断。京都本園寺他五ヶ所現存。（定一二五頁 原漢文）

貴札之を開きて拜見す。御痛みの事、一たびは歎き二たびは悦びぬ。維摩詰經に云く、「爾の時に長者維摩詰自ら念ずらく、寢て床に疾む。爾の時に仏文殊師利に告げたまわく、汝維摩詰に行詣して疾を問え」と云云。大涅槃經に云く、「爾の時に如来、乃至、身に疾有るを現じ、右脇にして臥したまう。彼の病人の如くす」と云云。法華經に云く、「少病少惱」と云云。止観の第八に云く、「若し毘耶に偃臥し、疾に託て教を興す。乃至、如来滅に寄せて常を談じ、疾に因て力を説く」と云云。又云く、「病の起る因縁を明かすに六有り。一には四大順ならざる故に病む。二には飲食節ならざる故に病む。三には坐禅調わざる故に病む。四には鬼便りを得る。五には魔の所為。六には業の起るが故に病む」と云云。大涅槃經に、「世に三人の其の病治し難き有り。一には大乘を誘す。二には五逆罪。三には一闍提。是の如き三病は世の中の極重なり」と云云。又云く、「今世に悪業成就し、乃至、必ず地獄なるべし。乃至、三宝を供養するが故に、地獄に墮ちずして現世に報を受く。所謂頭と目と背との痛」等云云。止観に云く、「若し重罪有りて、乃至、人中に軽く償うと。此は是れ、業の謝せんと欲する故に病むなり」と。竜樹菩薩の大論に云く、「問うて云く、若し爾れば華嚴經乃至般若波羅蜜は秘密の法に非ず。法華は秘密なり等。乃至、譬えば大薬師の能く毒を変じて薬と為すが如し」と云云。天台此の論を承けて云く、「譬えば良医の能く毒を変じて薬と為すが如く、乃至、今經の得記は即ち是れ毒を変じて薬と為すなり。故に論に云